

キャリア形成における「リフレクション」の意義に関する研究
自律的キャリアの「ドリフト」の構造に着目して

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
上岡 由季

本研究の目的は、自らの力で人生を生き抜いている自律的キャリア形成を行う起業家に焦点を当て、組織内キャリアの閉塞感脱却のてがかりを模索することである。自律的キャリアを歩む個人に着目することは伝統的キャリア論に一石を投じ、組織内キャリアの活性化の可能性を秘めていると考えられる。

研究方法は、従来の伝統的キャリア論のうちの代表的なキャリア・アンカー、キャリア・トランジション・モデル、節目のキャリア・モデルの3つに、インタビュー調査を行った2者の自律的キャリア・ヒストリーを当てはめる形で検証を行っていった。抽象的な理論は形態的な区別に有効ではあるが、現実的な移行や発展はその過程でそぎ落とされてしまっている。そこに現実の事例的検討を組み入れることによって、リアリティのある、現代に即したキャリア理論を再考することに意義がある。

結果として判明したのは以下の4つである。

(1) 彼らはキャリア・アンカーの8種類のいずれかで動いているのではなく、その個人特有の価値観ともいえる「指向性」が一貫した行動を生起させている。

(2) 彼らはキャリア・トランジション・モデルにおける「安定化」のフェーズに行くことはなく、また、節目のキャリア・モデルの「ドリフト」に流されるわけでもなく、他者・環境と自己との相互作用から起こる「リフレクション」によって能動的にキャリアの安定したサイクルを回している。

(3) その安定したサイクルは キャリアの模索 指向性によるキャリア決定 アクション リフレクションの4つのフェーズを移行する。ときに避けられない環境の変化やキャリア決定とアクションにズレが生じた場合は、積極的に修正をかけるために アクションから 転換期を迎え、再び リフレクションから キャリア決定を行っている。

(4) 安定したサイクルには2つ種類があり、1つは彼らのような能動的・現実的にキャリア形成を行う「自分づくりサイクル」であり、これを駆動させているものが「リフレクション」であると考えられる。もう1つは現代の若者が陥りがちな「自分探しサイクル」である。「自分探しサイクル」は漠然としたキャリア決定から起こる適切でないアクションから、地に足がつかない状態でキャリア形成を行ってしまうものである。これは長続きせず、現実を不本意に受け入れ「諦めのサイクル」となってしまう。

現代は学校と社会がアクセスしにくい状態にあり、現実の見えない「自分探しサイクル」になってしまいがちである。そうではなく現実的で自律的な「自分づくりサイクル」を提示することは、人々を迷わせることなく、キャリア教育においても雇用する企業にとっても有用なこととなるだろう。

本研究は、サンプルが非常に少ないために、キャリア理論の再考とまではいかない。彼らの追跡調査や企業内ベンチャーで働く人々やフリーランスなど多様な自律的キャリアを歩む人々に焦点を当てた研究によって、「自分づくりサイクル」を確かなものとするリフレクションの実態を調査していきたい。